

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

### 第 224 回 初老の親父の「愚痴」でしょう？

2007.10.21

先日、久々に会った旧友と一杯やった。あまり口数もなく、おもむろに杯を酌み交わすだけなのに、妙に落ち着き、ただ、淡々と時間が経過していった。そんな呑み方が似合う歳になったのかもしれない。

「...我が家のリビングに可愛い額に入った写真があるんだ。家内と家内の両親、そしてうちの子供達がニコニコ微笑んで写っている。ペットの犬までもちゃんと納まっている。ある時ふと気が付いた。そこに、俺がいないんだよ...」

そう、静かに語る彼は、怒りの表情は全くなく、ただ闇雲に、寂しそうな初老の紳士にしか見えなかった。

決していがみ合う、無教養な家族ではない。どちらかといえば自慢できる家族とっていいかもしれない。そこに彼がいてこそ「家族」と言えるはずである。「俺こそがその家族の『柱』」...そう信じきっていた彼は、このフォトプレートの、異様なまでの「輝き」に愕然とした。

犬は別として、確かに、フォトプレートの登場人物は、文字通り、血のつながりがある。彼を含めると、直接血のつながりがない人の構図となり、やや複雑になるのかもしれない。

一流大学を卒業し、過激な競争を勝ち抜いて就職した一流企業に生涯を捧げ、それでも必死に家庭を守り、時には威厳ある「親父」を演じ、家族のためと「滅私奉公」してきたつもりの彼の存在は、小さなフォトプレートの中には、どこにも見当たらなかった。

「家族」とは何だろうか？ 「親父」って役割は、一体何だったのか？

定年を目前に控えた歳になって初めて、そんな疑問と向かい合った彼は、その寂しさをどこへ向けていいのか、至極、辛そうに見えた。それでも彼は、家族を心から愛しているという。家族を不幸にすることは、自分の命に代えてもできないと言い切った。

「...安心しろよ、俺も似たようなもんだ。お前と同じ思いだよ、でも、お父さんの存在は、たぶん、それを踏まえているのかもしれないぞ。それが家族なんだと思うよ、...」つい、こんな訳が分からんことを言ってしまった自分も、彼と同じ立場にいる事、分かっている。いつ、自分が同じ愚痴を言っていたかもしれない...そう思うと、背筋が冷ややかに凍りついていた。でも、目の前の彼は、ほっと一息つき、何度となく首を縦に振っていた。そして、自らに言い聞かせるように、小さな声で...「そうだよな...」と、静かに呟いていた。

秋の夜長、初老の親父が二人で呑み交わす。カッコいい親父を演じるのは、あと僅か、たまには気を許して愚痴でも言いつこしよう。ほんの一時だけでも.....。